



Title	スターリン批判とモンゴル人民共和国の政治過程：ソ連の影響下におけるモンゴル指導部の権力闘争を中心に
Author(s)	オユンバートル, ムンヘジン
Citation	スラヴ研究, 61, 55-82
Issue Date	2014-07-04
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/56921
Type	bulletin (article)
File Information	SS61_003.pdf



[Instructions for use](#)

スターリン批判とモンゴル人民共和国の政治過程

—— ソ連の影響下におけるモンゴル指導部の権力闘争を中心に ——

オユンバートル・ムンヘジン

はじめに

モンゴル人民共和国⁽¹⁾（以下モンゴルに統一）の内政と外交は長い間、ソ連の大きな影響の下にあった。しかし、その政治過程を史料に即して具体的に分析した研究は極めて少ない。本稿はとくにスターリン批判期に注目し、この時期にモンゴルの指導者として登場したツェデンバル（Ю. Цэдэнбал⁽²⁾ 1916～1991年）の権力掌握過程を検討する。この時期には、他のソ連圏諸国と同様にモンゴルにおいてもその政治路線の方向をめぐって激しい政治闘争が展開された。この過程を検討することによって、本稿では以下の問いに答えたい。第一に、スターリンの死後、モンゴル政治はどのように変化したのか。第二に、その時期にソ連がどのようにモンゴル政治に関与し、その影響はどのようなものであったのか。第三に、スターリン批判後、モンゴル政治はどのように変化したのか。

ツェデンバル時代のモンゴルの政治闘争を通してソ連＝モンゴル関係を論じた先行研究は以下の二つに大別できる。第一に内政に重点を置いた研究であり、第二に外交に主眼を置いた研究である。前者としてはまず、特定の政治家の伝記を中心にした研究がある。たとえば、歴史家ジャンバルスレンの『世紀の大使』⁽³⁾、歴史家ボルドバートルの『私が古いのを世界は知っている』⁽⁴⁾と『プムツェンドの生活と業績』⁽⁵⁾がある。しかし、これらの研究は伝記としての性質上、ソ連＝モンゴル関係の一部にしか触れていない。次に、本稿と論点が重なる研究としては、ダシプレブとソニーの『モンゴルにおける恐怖の支配』⁽⁶⁾がある。同書

- 1 1921年の革命により、ボグドジャブザンダンバ8世を君主とする制限君主制国家として誕生した。1924年にジャブザンダンバ8世が死去したことで、同年11月に第一回大ホラル（国会）が新たな憲法を制定し国名をモンゴル人民共和国に改名した。その後、1992年に国名をモンゴルと改めた。
- 2 ドルベドダライハン・アイマグ（現ウブス県ダブスト・ソム）生まれ。1939年、モンゴル人民革命党入党。1940年、モンゴル人民革命党書記。1941年、全軍総司令官代理兼モンゴル人民革命軍政治部長。1946～1952年、閣僚会議副議長。1952年5月～1974年、閣僚会議議長。1958年からモンゴル人民革命党第一書記。1974～1984年、モンゴル人民大ホラル議長。Дамдинсүрэн С., Батсайхан О., Шенелев В.Н. Монголын Тухай БХК(б)Нын Баримт Бичиг 3-богь 1941–1952. УБ., 2009. тал 307–308.
- 3 Жамбалсүрэн Ц. Ю. Цэдэнбал эрин зууны элч. УБ., 2007.
- 4 Болдбаатар Ж. Миний хоцрогдсонийг дэлхий мэднэ. Булган, 1994.
- 5 Болдбаатар Ж. Дулаан хааны хүү Монгол улсын нэрт зүтгэлтэн Г. Бумцэндийн амьдрал, үйл ажиллагаа. УБ., 2001.
- 6 D. Dashpurev, S. K. Soni, *Reign of Terror in Mongolia 1920–1990* (New Delhi: South Asian Publisher, 1992).

はモンゴル内政に着目し、チョイバルサンとツェデンバル時代の政治粛清を取り上げている。しかし利用した文献は多くなく、当時のモンゴルとソ連の複雑な政治関係を実証的に分析したとは言い難い。以上と異なり、モンゴル政治に着目しながらソ連の影響を指摘する研究として、ナディロフの『ツェデンバル 1984 年』⁽⁷⁾、在モンゴル・イズヴェスチヤの特派員を務めたシンカレフの『ツェデンバルとその時代』⁽⁸⁾、歴史家ダシダワーとボルドバートルの共著『改革のための運動とその運命』⁽⁹⁾がある。これらの文献のなかで本稿の問題意識にもっとも近いのはナディロフの文献である。同書は、モンゴル内政に対するソ連の影響を生々しく論じているが、基本的にツェデンバル時代の末期に注目している。確かに、ツェデンバル末期の権力闘争は重要で、それ自体として研究すべきテーマであるが、ソ連＝モンゴル関係史において革命時以来もっとも大きな転換点であった 1950 年代を研究しない限り、それ以降の両国関係の基本的な性格は明確にならないだろう。

他方、モンゴルの外交問題に力点を置いている研究としては、ラーフルの『中ソ間のモンゴル』⁽¹⁰⁾、坂本是忠の『モンゴル政治と経済』⁽¹¹⁾、『辺境をめぐる中ソ関係史』⁽¹²⁾が挙げられる⁽¹³⁾。また、モンゴル外交問題を政治、経済、社会等多方面から概説的に分析したルーペンの『モンゴルはどのように支配されたのか』⁽¹⁴⁾もある。こうした研究の中で本研究にもっとも近いものとしては、ソ連＝モンゴル外交関係に注目した寺山恭輔の『1930 年代ソ連の対モンゴル政策』⁽¹⁵⁾とソニーの『モンゴル・ソ連関係』⁽¹⁶⁾が重要である。寺山の研究はノモンハン事件に至るまでのソ連の対モンゴル政策を描いており、ソ連側の史料の利用面で抜きん出ている。しかし、同研究はモンゴルの国内政治闘争を分析しておらず、しかも本稿が対象とする時期以前を対象としている。これに対してソニーの研究は、政治、経済、社会、教育の広い面においてソ連がモンゴルに大きな影響を及ぼしていたことを指摘している。しかしソニーは、本稿が対象とする政治闘争について踏み込んだ議論を実証的に展開しておらず、ソ連がモンゴルにどのような影響を及ぼしたのかについても検討が不十分である。

以上のような問題点を踏まえ、本稿では、モンゴル国内政治闘争の過程を検討することでソ連がモンゴル政治に及ぼした影響を分析する視角を切り拓きたい。言い換えれば、本稿の目的はモンゴルの内政と外交の連関に着眼することでスターリン批判前後のソ連＝モンゴル関係を再検討することである。

7 *Надиоров Ш.Г. Ю. Цеденбал 1984 год. М., 1995.*

8 *Шинкарев Л. Цеденбал и его время. Том 1, 2. М., 2006.*

9 *Болдбаатар Ж, Дашидаваа Ч. Шичлэлийн төлөө хөдөлгөөн, түүний хувь заяа. УБ., 2005.*

10 R. Rahul, *Mongolia between China and USSR* (New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers, 1989).

11 坂本是忠『モンゴルの政治と経済』アジア経済研究所、1969年。

12 坂本是忠『辺境をめぐる中ソ関係史』アジア経済研究所、1974年。

13 他に共産圏関係史の観点からモンゴル政治に触れるものとして、下斗米伸夫『アジア冷戦史』中公新書、2004年がある。

14 R. Rupen, *How Mongolia Is Really Ruled* (Stanford: Hoover Institution Press, 1979).

15 寺山恭輔『1930年代ソ連の対モンゴル政策』東北アジア研究センター叢書第32号、2008年。

16 S. K. Soni, *Mongolia-Russia Relations* (Delhi: Shipra Publications, 2002).

本稿が扱う時期のモンゴルの内政と外交に関する資料は、依然として十分に公開されていない。そのため、本稿の分析も回顧録などに多く依っている。とはいえ、本稿ではこれまでほとんど明らかにされてこなかったモンゴル人民革命党の公文史料館史料（HTA）を可能な限り利用する。また、モンゴル外務省史料館（ГХЯ）、モンゴル科学アカデミー付属国際関係研究所とロシア国立社会政治史文書館（РГАСПИ）が合同編集したロシア＝モンゴル関係の史料も利用する。その他、モンゴルの新聞等定期刊行物も利用する。

1. 1930年代のモンゴル＝ソ連関係とツェデンバルの登場

本論の出発点をどこに定めるかという点は極めて重要である。ここではツェデンバルの支配のあり方に決定的な影響を与えたチョイバルサン（Х. Чойбалсан⁽¹⁷⁾ 1895～1952年）に着眼し、その権力掌握期におけるモンゴルの内政及び外交政策を概観することから始めたい。

チョイバルサンは1934年11月にスターリンの後押しを得て、翌1935年に開催されたモンゴル第19小ホラル（最高意思決定機関）においてモンゴル副首相になった。1936年には内務省のトップとなり、大きな権力を掌握した⁽¹⁸⁾。知られる限り、1937年から1939年にかけてソ連とモンゴルにおいて大粛清が行われ、モンゴルでは反革命分子、スパイといった容疑で2万474人が銃殺され、5103人が10年の実刑を宣告された⁽¹⁹⁾。この粛清は概ねチョイバルサンの責任の下で実施されたと言われている。しかし、彼が実際に大粛清を行い、政敵排除を行ったことは否定できないにしてもそのイニシアチヴが彼によるものであったとは考えにくい。なぜならば当時、ソ連でも大粛清が行われており、モンゴルにおける粛清は、多くの点でソ連の直接的および間接的な影響下になされたと考えられるからである。歴史家イチンノロフによれば、1937年8月24日にソ連内務人民委員代理フリノフスキー（М.П. Фриновский）、国防人民委員代理スミルノフ（Смирнов）、在モンゴル・ソ連大使ミロノフ（С.Н. Миронов 1937年8月19日～1938年5月3日在任）は、モンゴルにおける日本のスパイ組織の摘発を名目に115名の名前を載せた名簿をチョイバルサンに渡した。イチンノロフは、この時からモンゴルの大粛清が始まったと主張している⁽²⁰⁾。また、フリノフスキーがモンゴルの若干の首脳と、今後逮捕すべき人物について話し合っていたことをソ連内

17 1914～1918年、イルクーツクの体育高等学校で学ぶ。1921年、モンゴル人民革命臨時政府の人民軍政治委員。1922年、東部国境問題担当相。1923年モスクワの軍事アカデミー入学。1924年、モンゴル人民革命党中央委員会、最高会議幹部会委員。1925～1940年、国家大ホラル代表。1924～1928年、モンゴル人民革命軍司令官。1929年1月23日～1930年4月27日、国家小ホラル議長。1930～1931年、外務大臣。1931～1935年、農業牧業大臣。1934年～、閣僚会議副議長。1935～1939年、第一副議長。1936～1940年、内務大臣。1937年9月～、陸軍大臣兼全総軍司令官（1936年、称号元帥）。1939年3月28日～1952年1月26日、首相。Alan J. K. Sanders, *Historical Dictionary of Mongolia*, third edition (Lanham, Maryland: Scarecrow Press, 2010), pp. 159–160.

18 *Ичинноров С. Х орлоогийн Чойбалсангийн улс төрийн амьдрал, цаг үе. УБ., 2009. тал 92–95.*

19 *Ринчин М. Улс төрийн хэлмэгдүүлэлт ба цагаатгал. УБ., 2000. тал 40.*

20 *Ичинноров. Хорлоогийн Чойбалсангийн. тал 96.*

務人民委員エジョフ（Н.И. Ежов）に報告する1937年9月13日付の電報もある。同史料には「9月7日にモンゴルの指導者チョイバルサンやアマル（Амар⁽²¹⁾ 1887～1941年）とヨンゾン（Ёнзон）やダムディン（Дамдин）らを逮捕する件で話し合い、合意した⁽²²⁾」と記されている。さらに、ソ連側が肅清に関わったことを示す1938年10月20日付の電報も知られている。これはウランバートルにいたメフリス（Мехлис⁽²³⁾ 1889～1953年）からスターリンに送られたものである。そこで、メフリスはスターリンに対してモンゴル人民革命軍政治委員ナイダン（Найдан）の逮捕を許可するように要請していた⁽²⁴⁾。以上からすれば、チョイバルサンはソ連側の強い圧力の中で肅清に踏みきったと解釈できよう。

ツェデンバルは、このようなモンゴル＝ソ連関係の中で、モンゴルの次期指導者として育った。彼は、1916年9月17日にモンゴルのウブス県ダブスト・ソムで生まれた⁽²⁵⁾。1925年から4年間ホブド市チャンダマン山の県の小学校で学んだ後、1929年から2年間ソ連のイルクーツクの国立大学教育学部付属のモンゴル学校で学んだ⁽²⁶⁾。その後、1931年から1932年までイルクーツクの病院の職業技術学校準備コース、1932年から1933年までイルクーツクの経済大学予備校、1933年から1934年までウラン・ウデにあるモンゴル大学予備校、そして1934年から1938年まではイルクーツクの経済大学で学んだ⁽²⁷⁾。

ツェデンバルがソ連に留学していた1920年代から1930年代の時期には、モンゴル政府は人材育成のため積極的に若者を海外留学に送り出していた。若者の主たる留学先はドイツやソ連であり、1929年にはツェデンバルを含めた22人がソ連に留学した。彼らは年齢に応じて組み分けられ、組ごとにロシア人の家に滞在した⁽²⁸⁾。つまり、ツェデンバルはモンゴルにおける大肅清前の時期にソ連に留学することが出来た非常に恵まれた世代に属していると言える。

ソ連留学時のツェデンバルは、勤勉で優秀な学生であった。たとえば、イルクーツクの学校が作成したツェデンバルの推薦状には、「成績優秀で規律が正しく、授業によく集中し、

21 1923～1928年、外務大臣、内務大臣、工業大臣、副首相、モンゴル銀行総裁。1928～1930年、首相。1930～1932年、科学アカデミー所長。1932～1936年、モンゴル人民共和国小ホラル議長。1936～1939年、モンゴル人民共和国首相。1941年肅清。*Дамдинсүрэн С., Батсайхан О., Шепелев В.Н.* Монголын Тухай БХК(б)Нын Баримт Бичиг 1-боть 1920–1932. УБ., 2002. тал 479.

22 *Дамдинсүрэн С., Батсайхан О., Шепелев В.Н.* Монголын Тухай БХК(б)Нын Баримт Бичиг 2-боть 1933–1940. УБ., 2005. тал 248–249 (МУУТА [Монгол улсын үндэсний төв архив]. ф. 445, д. 2, хн. 74, х. 1–3).

23 1918年、共産黨員。1930年、赤色教授（養成）学院。1940～1941年、ソ連国家統制人民委員。1941～1942年、赤軍政治部長。*Дамдинсүрэн, Бусад.* Монголын Тухай БХК(б)Нын Баримт Бичиг 3-боть 1941–1952. тал 306.

24 МУУТА х. 445, д. 2, хн.78, х. 1.

25 *Батцэнгэл Л.* Миний мэдэх Ю. Цэдэнбал. УБ., 2001. тал 26. Уブス県ダブスト・ソムはモンゴルの北西に位置し、ロシア連邦と接する国境の町である。少数民族が多く、主にドルベト族とオイラト族が生活していた。同町の人口は、モンゴル人口の2.7%を占める。特にツェデンバルの出身のドルベト族はウブス県の西に生活基盤を持っている。

26 *Жамбалсүрэн. Ю.* Цэдэнбал эрин зууны элч. тал 59.

27 *Батцэнгэл.* Миний мэдэх Ю. Цэдэнбал. тал 27.

28 *Жамбалсүрэн. Ю.* Цэдэнбал эрин зууны элч. тал 58–59.

真面目である。全学期において欠席や遅刻はなく、社会活動に積極的に参加し、他人のことをよく手伝う。生産活動によく参加し、賞を受けた」と記されている⁽²⁹⁾。1931年にはレーニン共産主義青年同盟とモンゴル革命青年同盟に加盟した。このような経歴はツェデンバルが早い時期からソ連との深い繋がりを形成していたことを示している。彼はソ連で教育を受け、ロシア人のフィラトヴァ（А. Филатова⁽³⁰⁾ 1920～2001年）と結婚したことで、ソ連との繋がりをさらに強めた。

やがてツェデンバルはチョイバルサンに見出され、モンゴルの要職に就いていくが、それはチョイバルサン判断のみに基づいていたとは考えにくい。なぜならば上述した通り、当時のモンゴルはソ連の強い影響下にあり、チョイバルサンが人事のすべての決定を自由に下していたと考えにくいからである。チョイバルサンへのソ連に対する政治的な依存については、以下のような指摘が挙げられる。第一に、かつてチョイバルサンに側近であったジャンバルドルジ（Б. Жамбалдорж⁽³¹⁾ 1908～1998年）は、チョイバルサンがイヴァノフ（А.И. Иванов⁽³²⁾ 1939年6月～1947年9月在任、1906～1948年）在モンゴル・ソ連大使の支配下にあったと述べている⁽³³⁾。第二に、ツェデンバルの日記には、「チョイバルサンは能力は十分ではなく、ソ連顧問の知識の豊富さと正しさを信じ込んでいた。何かにつけ、必ずソ連人顧問に相談していた。（中略）しかし時に全く間違ったアドバイスを与える顧問もいた⁽³⁴⁾」という記述がある。また、「彼は30年代の粛清が繰り返されるのを恐れ、スターリンの言うことに従った⁽³⁵⁾」とも記してあった。以上の指摘が事実だとすれば、チョイバルサンがモンゴルの重要な人事ポストをすべて自身で決めていたとは考えにくい。

29 *Жамбалсүрэн*. Ю. Цэдэнбал эрин зууны элч. тал 61.

30 ツェデンバルがフィラトヴァと結婚したことには、在モンゴル・ソ連大使館の意向が大いに作用した。特にフィラトヴァを紹介するに際して、ヴァジノフ（Н.П. Важнов）の功績は大きかった。*Шинкарев Л.* Цеденбал и его время. Том 2. С. 284. ヴァジノフは、1946～1947年、在モンゴル・ソ連大使顧問兼モンゴル人民共和国中央委員会顧問、1947年12月～1948年10月、在モンゴル・ソ連大使。*Дамдинсүрэн, Бусад.* Монголын Тухай БХК(б)Нын Баримт Бичиг 3-богь 1941-1952. тал 338.

31 モンゴル中央に位置するドンド・ゴビ県のウルジート・ソム生まれ。1908年、識字能力向上のため、6カ月のコースを修了。1928年、ボグド・ハン山のバヤサグラント・ソムの書記。1930年半、ボグド・マンダフ・ソム長。1932年6月、南ゴビ県中央委員会顧問。1936年8月、モスクワの東方勤労者共産大学に入り、1939年に帰国。1939～1941年、内務省国家防衛局長。1941～1946年、法務大臣。1946～1957年、検事総長。1958～1960年、在中国・モンゴル大使館政治顧問。*Жамбалдорж Б.* Дардан бус замаар далаад жил. УБ., 1995.

32 1926年、共産党に入党、1935年、スモレンスクで三年制夜間学校を卒業。1939年6月～1941年5月、在モンゴル・ソ連全権代表。1941年5月～1947年9月、在モンゴル・ソ連大使。1947年9月～1948年5月、ソ連共産党閣僚会議付属第三情報副局長。*Дамдинсүрэн, Бусад.* Монголын Тухай БХК(б)Нын Баримт Бичиг 3-богь 1941-1952. тал 306. 彼は当時の在モンゴル・ソ連代表の中でもっとも強い権力を有し、チョイバルサンがどこに行っても付いて回ったという。また、在モンゴル時にソ連軍上級大将に昇格している。*Бат-Очир Л., Эмхтгэж оршил бичсэн Болд О., Туяа Б.* Хорлоогийн Чойбалсан. УБ., 2010. тал 56.

33 *Жамбалдорж.* Дардан бус замаар далаад жил. тал 32.

34 *Сумьяа Б.* Гэрэл сүүдэр: Ю. Цэдэнбалын хувийн тэмдэглэлээс. УБ., 1992. тал 57.

35 Мөн тэнд. тал 22.

ツェデンバルは1938年にモンゴル経済大学長、1939年3月にモンゴルの財務副大臣、同年7月に財務大臣兼貿易銀行総裁と要職を歴任した⁽³⁶⁾。そして翌年3月20日から4月5日に開かれたモンゴル人民革命党第10回党大会で中央委員会書記に選出された。彼はこの時弱冠23歳だった。注目されるのは、このような重要ポストに就く前にツェデンバルがソ連を訪問し、スターリンと面会していた事実である。

チョイバルサンとツェデンバルがスターリンに面会したのは1940年1月4日である。ロシアのジャーナリスト、シンカレフによれば、ツェデンバルはこの時のことを次のように語ったという。「宴会の席でベリヤが大きな杯にコニャックを入れ、私に飲めと言った。私は立ちあがってスターリンのもとへと歩み寄り、閣下の健康のためにと言って乾杯した。スターリンは笑顔を見せ、私に対し、貴君の健康のためにと言った。スターリンは唯一、クレムリンの中で23歳の私に対して丁寧な貴君(Вы)という人称を使った⁽³⁷⁾」。

事実が彼の回想通りであったのか否かは不明であるが、歴史家ジャンバルスレンによれば、チョイバルサンはツェデンバルの書記任命に際して、「ツェデンバルは努力家で良い教育を受けている。私たちはスターリンと会ったが、その時にツェデンバルの性格や教育をスターリンが高く評価した⁽³⁸⁾」と述べたという。以上のことから考えると、この時のスターリンとの面会は、ツェデンバルをスターリンに紹介するためのものだったと考えることができよう。

2. チョイバルサン崇拜期におけるツェデンバル

1940年代はチョイバルサン崇拜の時代だった。この時期には、1934年9月28日のモンゴル人民革命党第9回党大会において選出された政治局員11人の内、チョイバルサンだけが粛清されず残っていた⁽³⁹⁾。彼は1939年3月22日、国家小ホールにおいて首相に選出された。これにより、首相、内務大臣、国防大臣兼総司令官、外務大臣、中央委員会政治局員を兼任し最高指導者になった⁽⁴⁰⁾。リンチンによれば1939年7月7日、中央委員会第4回総会において党中央委員にバーサンジャブ(Б. Баасанжав⁽⁴¹⁾ 1906～1940年)、ルハグバスレン(Ж. Лхагвасүрэн)、ダンバ(Д. Дамба⁽⁴²⁾ 1908～1989年)、シャグダルジャブ

36 *Батцэнгэл*. Миний мэдэх Ю. Цэдэнбал. тал 21.

37 *Шинкарев Л.* Цеденбал и его время. Том 1. С. 41–42.

38 *Жамбалсүрэн*. Ю. Цэдэнбал эрин зууны элч. тал 76.

39 *Ринчин*. Улс төрийн хэлмэгдүүлэлт ба цагаатгал. тал 29.

40 *Роцин С.К.* Маршал Монголии Х. Чойбалсан штрихи биографии. М., 2005. С. 83.

41 1931～1932年、ホブド県人民革命党部局長兼中央委員会顧問。1932～1936年、ホブド県人民革命党書記。1936～1940年、モンゴル人民革命党中央委員会書記兼政治局員。1940年、粛清。*Дамдинсүрэн, Бусад*. Монголын Тухай БХК(б)Нын Баримт Бичиг 3-боть 1941–1952. тал 307.

42 1908年3月29日、ブルガン県生まれ。1924年、モンゴル革命青年同盟加入。1924年、モンゴル革命青年同盟県レベル書記とウランバートル市青年同盟書記。1930年、モンゴル人民革命党入党。1938年、ウムヌ・ゴビ県第一書記。1939年、最高会議幹部会及びウランバートル市中央委員会書記。1943年、政治局員候補。1947年、政治局員。1947～1954年、モンゴル人民革命党第二書記。1954年、モンゴル人民革命党第一書記。1958年11月、モンゴル人民革命党第二書。1959年、追放。Sanders, *Historical Dictionary of Mongolia*, pp. 185–186.

(Д. Шагдаржав)、ルブサンシャラブ (Д. Лувсаншарав⁽⁴³⁾ 1900～1941年)、ドグソム (Д. Догсом)、チョイバルサンの7人が選出された。しかし1940年3月になると、チョイバルサン、ウランバートル市の書記ダンバ、人民革命軍将軍代理ルハグバスレンの三人以外は全員粛清されていたという⁽⁴⁴⁾。

ここからチョイバルサンの独裁体制が徐々に固まったと考えられる。バトオチルによれば、ツェデンバルは1940年1月19日に人民革命党政治局の会議においてチョイバルサンについて次のように述べた。「元帥は今後のモンゴルの発展計画を描いた。それは歴史上見られない大成功を収めた⁽⁴⁵⁾」。また、彼は1945年に行われたチョイバルサンの50歳の誕生日においても「チョイバルサンはモンゴル人民の息子であり、モンゴル革命の指導者である。我が国家の建設者でその指導者であり、我が軍の魂で建設者だ」などと褒め称えた⁽⁴⁶⁾。さらに、1949年3月10日、ジャムスレンの『人民の読書』において褒め称えられていたツェデンバルは中央委員会に次のような手紙を書いた。「我が党と人民は一人の指導者を有している。その人物はチョイバルサンである。我々は党内のすべての層に指導者にならうとする意識を育ててはならない⁽⁴⁷⁾」。ツェデンバルは明らかにチョイバルサン個人崇拜を広めようとしていたのである⁽⁴⁸⁾。ツェデンバルが当時チョイバルサンの後継者としての地位を固めていたとすれば、ツェデンバルのチョイバルサン礼賛が自身の権力基盤強化を意味していたことは想像に難くない⁽⁴⁹⁾。

以上のように、モンゴルにおいてチョイバルサンは絶大な権力を手に入れ崇拜されたが、ツェデンバルを中心とする若手に完全な服従を強いたわけではなかった。とりわけ、モンゴルをソ連に加盟させるという問題においてチョイバルサンとツェデンバルの意見は対立した。

バーサンドルジによれば、ジャンバルドルジは、1944年7月5日に人民革命党中央委員会に宛てて次のように意見を表明した。「私は、モンゴル人民革命党員または、知識人とし

43 1927～1928年、人民革命党幹部育成学校。1928～1929年、モスクワの東方勤労者共産大学卒業。1930～1932年、モンゴル人民革命党書記代理。1932年6月～1939年7月、モンゴル人民革命党中央委員会第一書記。1941年粛清。*Дамдинсүрэн, Бусад*. Монголын Тухай БХК(б)Нын Баримт Бичиг 1-боть 1920–1932. тал 510.

44 *Ринчин*. Улс төрийн хэлмэгдүүлэлт ба цагаатгал. тал 37.

45 *Бат-Очир*. *Эмхтгэж оршил бичсэн Болд, Туяа*. Хорлоогийн Чойбалсан. УБ., 2010. тал 27.

46 Мөн тэнд. тал 28.

47 Мөн тэнд. тал 29.

48 歴史家ローシチンもチョイバルサンについて次のように述べる。「ハルハ河〔ノモンハン事件：引用者〕での勝利により、国民のなかでチョイバルサンの人気は急上昇し、彼は尊敬されるようになった。(中略)モスクワを訪問し、スターリンを含めたソ連指導部との友好関係を維持した。人民革命党第10回党大会および国家第8回大ホラルを指導し、そこで演説を行った。そのことにより、彼は重要な意思決定者であり、国民の指導者でもあるということに疑いを抱かなくなった。(中略)スターリンを崇拜すると同時にモンゴルにおいてはチョイバルサン崇拜が発生していた。チョイバルサン崇拜にソ連の顧問達も少なからず貢献していた。」*Роштин*. *Маршал Монголии*. С. 101.

49 1949年12月のスターリン70歳の誕生日を祝うため共産圏諸国のリーダーが集うなか、ツェデンバルはモンゴル代表を率いて参加するなど、モンゴルにおけるその権勢を内外に示していた。*Э мэхтгэгчид*. *Даидаваа Ч., Өлзийбаатар Д., Чулуун С.* Сталин ба Монгол орон архивын баримтын эмхтгэл. УБ., 2010. тал 257–265 (МУУТА х. 11, д. 1, хн. 1216).

て言うとは偉大なソ連に我がモンゴルが入ることは今後の発展に大きな意味を持つだけでなく、その時期が来たと思う(中略)この意見は、私だけではなく、党員や非党員である多くの人々共通の意見である⁽⁵⁰⁾。また、元在モンゴル・ソ連大使館職員ナディロフによれば、1944年にスレンジャブ(Ч. Сүрэнжав⁽⁵¹⁾ 1914～1998年)が在モンゴル・ソ連大使イヴァノフに面会した際「モンゴル人民共和国をソ連に加盟させることは必須である」と説いたという。しかし、モスクワはイヴァノフに対してこの問題を慎重に扱い、同じような話題が出る原因を作らないように進言した。そして、ツェデンバルがこの手紙の内容をチョイバルサンに報告し、さらにスターリンに相談するように促したという⁽⁵²⁾。

1940年代においてチョイバルサンとツェデンバルがモンゴル国内の指導権を握っていたことを考えれば、ジャンバルドルジとスレンジャブが単独でソ連への加盟を構想したとは考えにくい。また、チョイバルサンがソ連加盟に反対する立場をとっていたとすれば⁽⁵³⁾、彼らが第二の権力者であるツェデンバルの同意なくしてそのような行動に出たとは考え難い。つまり、ツェデンバルは自らが直接このような動きを見せるとモンゴル人民共和国の独立を支持していたチョイバルサンとの対立を招くため、若手を利用して自身の意見を示唆したものと思われる。

ツェデンバルは、1950年になるとソ連に加盟するという考えを堂々とソ連側に伝えている。シンカレフによれば、1950年11月10日に在モンゴル・ソ連大使プリホドフ(Приходов⁽⁵⁴⁾ 1906～1989年)からマレンコフ宛てに次のような秘密文書が届いた。

モンゴル人民共和国の発展は他の諸共和国の発展に比べ、著しく遅れているという結論に達した。このような状況から抜け出すためには、ソ連に加盟することが必要であると彼らは考えている。(中略)このような意見をモンゴル人民革命党書記ツェデンバルとモンゴル人民共和国小ホラル副議長ツェデブが公式に大使館に訪問した時に表明した。また、ツェデンバルとチョイバルサンの名を借

50 *Баасандорж Ц.* 20-рЗууны Монголын түүхт хүмүүс улс төрийн хөрөг-1. УБ., 2007. тал 341.

51 1932年、モンゴル人民革命党に入党。1936～1939年、モスクワの東方勤労者共産大学で学ぶ。1939年、モンゴル人民革命党中央委員会イデオロギー部門担当。1940年、1943～1953年、1957～1959年、モンゴル人民革命党政治局員。1940年、中央委員会第二書記。1943年、中央委員会第二書記兼農牧業省大臣。1946年、農業担当副首相。1953年、政府行事担当第一副首相。1956～1958年、党中央委員会第二書記。1958～1959年4月、第一副首相。その後党大学、経済大学長、科学アカデミー歴史部門にて研究職。*Дамдинсүрэн, Бусад.* Монголын Тухай БХК(6) Нын Баримт Бичиг 3-боть 1941–1952. тал 308.

52 *Надилов. Ю.* Цеденбал 1984 год. С. 42.

53 ナディロフはチョイバルサンについて次のように言う。「チョイバルサンは〔ソ連に加盟する：引用者〕という意見があることを知っていた。チョイバルサンはこのような時期ではないと考え、その意見に賛成しなかった。チョイバルサンは内モンゴルをモンゴル人民共和国に統一し、自分の指揮下に統一モンゴルを作りたいことを望んでいた」。 *Надилов. Ю.* Цеденбал 1984 год. С. 43.

54 1928年、ソ連共産党員。1939年、モスクワの軍事政治アカデミーを卒業。1928～1938年、ソ連軍所属。1940年1月～1946年8月、在モンゴル・ソ連大使顧問兼モンゴル人民革命党中央委員会顧問。1946～1947年、ソ連外務省顧問兼東南アジア局長。1947～1948年、外務省職員。1948年10月～1951年12月、在モンゴル・ソ連大使。*Дамдинсүрэн, Бусад.* Монголын Тухай БХК(6) Нын Баримт Бичиг 3-боть 1941–1952. тал 312.

りて、一部のモンゴル人民革命党中央委員会メンバー、党大学生、その他の人々も表明している。⁽⁵⁵⁾

バーサンドルジによれば、その3カ月前の1950年8月4日に、バダルチ、ドゥゲルスレン、トゥムル・オチル（Д. ТөмөрОчир⁽⁵⁶⁾ 1921～1985年）、ツェンド（Л. Цэнд⁽⁵⁷⁾ 1920～1986年）らがチョイバルサンとツェデンバル宛てにソ連加盟の必要性を訴える趣旨の手紙を書いたという⁽⁵⁸⁾。

これに対してチョイバルサンはソ連加盟に反対した。バーサンドルジは、ダンバの以下のような回想を紹介している。

年月日は不明だが、ダンバによれば、チョイバルサンはツェデンバルと口論した。（中略）ツェデンバルが「モンゴルは単独で独立することはできない。ソ連に加盟したい」との意向を伝えるとチョイバルサンは、「あなたは国民のことを少し考えたほうがよい」と強い口調で言った。それに対してツェデンバルは、「私はあなたと争うために言っているのではない。ソ連国民になると、モンゴル民族が消滅してしまうということではないでしょう」と答えた。チョイバルサンは「なぜなくなるらないのか。モンゴル民族はなくなるだろう」と答えた。⁽⁵⁹⁾

以上からすれば、チョイバルサンは国内で大きな影響力を保持していたが、その統治は1930年代の時ほど厳しいものではなく、ツェデンバルを含め若手の政治家が国家の重大な決定についてある程度の独自の構想と影響力を持つのを許していたと考えられる。

3. ツェデンバルの権力掌握

ツェデンバルを抜擢したチョイバルサンは、1952年1月26日にクレムリンの病院で死去した⁽⁶⁰⁾。その直後から、彼の支持者たちの間では指導権をめぐる権力闘争が始まった。チョ

55 Шинкарев. Цеденбал и его время. Том 2. С. 104.

56 1921年、トウブ県生まれ。1941年、ソ連の職業訓練学校で学び、モスクワの東方勤労者共産大学を卒業。その後、ツェデンバルの助手兼モンゴル党中央学校で講師。1945年、モスクワ大学で学び1950年に哲学の学位を取得。1955年、党中央学校長、党歴史研究所の初代所長。1958年、党中央委員会書記、政治局員。1960年、人民大ホラル代議員。1962年、チンギス・ハーン800年記念日の行事を指揮、ソ連からの批判もあり追放される。Sanders, *Historical Dictionary of Mongolia*, pp. 693–694.

57 セレンゲ県生まれ。1945～1950年、プレハーノフ大学で学ぶ。1953年、モスクワ大学から学位を授与。1957年、シレンデブに代わり閣僚会議第一副議長に任命。1958年3月、第13回党大会で人民革命党政治局員。1958年11月、スレンジャブに代わりモンゴル人民革命党第二書記。1960年、国家大ホラル議長に選出され、トモル・オチルに代わりモンゴルソ連友好協会長に就任。1961年7月、モンゴル人民革命党第14回党大会で再度政治局員兼中央委員会書記に選出。1963年、追放。Sanders, *Historical Dictionary of Mongolia*, pp. 706–707.

58 Баасандорж. 20-р Зууны Монголын түүхт хүмүүс улс төрийн хөрөг-1. тал 341.

59 Баасандорж. 20-р Зууны Монголын түүхт хүмүүс улс төрийн хөрөг-1. тал 341.

60 Дамдинсүрэн, Бусад. Монголын Тухай БХК(б)Нын Баримт Бичиг 3-боть 1941–1952. тал 225 (РГАСПИ, ф. 82, оп. 2, д. 1287, л. 118).

イバルサンが築いた統治体制の継続に挑戦する者が現れたのである。

指導部にいたブムツェンド (Г. Бумцэнд⁽⁶¹⁾ 1881年9月11日～1953年9月23日) とスレンジャブがツェデンバルの権力掌握に反対した。特にブムツェンドは、長くモンゴルの政治に関与しており、それまでのソ連に過度に依存した政治体制に不満を持っていたと思われる⁽⁶²⁾。彼は、チョイバルサン時代のような個人崇拜がモンゴルに再び現れることを危惧し、集団指導体制への移行を望んでいたようだ。当時の権力闘争の当事者であったルハムスレン (Н. Лхамсүрэн⁽⁶³⁾ 1915～1990年) は以下のように回想している。

チョイバルサンが死去した後、誰を首相に選ぶかをめぐって激しい対立が起きた。ツェデンバルを選ぶことに反対したのは、主としてブムツェンドとスレンジャブであり、私〔ルハムスレン：引用者〕とダンバは賛成した。一番強く反対したのはスレンジャブであった。スレンジャブはツェデンバルについて、新聞か雑誌の編集長になればよいと語った。(中略) ブムツェンドは各会議においてツェデンバルが人民革命党第一書記に留任し、スレンジャブを首相〔すなわち最高権力者：引用者〕に、自らを国家小ホラル長とするよう提案した。(中略) しかし1952年5月27日、ツェデンバルが賛成多数で首相に選ばれた。ダンバはツェデンバルを首相とすべく、6回にわたってブムツェンドの説得を試みた。ダンバは後に、このことが誤りであったことを理解した。⁽⁶⁴⁾

ブムツェンドがツェデンバルへの権力集中に難色を示したのは、政治経験が10年に満たないツェデンバルには、モンゴル政治を担う十分な力量がないと考えたからかもしれない。また、ブムツェンドはソ連に対して理解を示す一方、モンゴルの自立についても考えをめぐ

61 トシェート・ハン県生まれ。1912～1918年、ウランバートル市労働者で地元の県に戻り地方行政で働いた。1920年、モンゴル人民革命指導者達に接触し、彼らに対して冬の服や収集や宣伝活動に従事。1921年、モンゴル革命指導者の一人スヘバートルに会い、部隊長に任命され、アルタンブラグの中国軍との戦い、バロン・ウンゲルンとの戦いに参戦、その後連隊長として反革命軍のナイダワンとジャンボランらの軍を撃退。1923年、モンゴル人民革命党入党。1928～1940年、地方革命行政の強化と封建階級の根絶、外国資本家の追放などに全力を挙げた。1940年、第10回大会ブムツェンドは中央委員会最高会議幹部会員。1940年7月6日、第8回国家大ホラルにて国家小ホラル議長に選出。1951年、国家大ホラル議長。Sanders, *Historical Dictionary of Mongolia*, p. 128.

62 *Болдбаатар*. Дулаан хааны хүү. тал 40–46, 51.

63 セレンゲ県生まれ。1927年12月、ボグド・ハン山県の行政府で勤務。1929～1935年、イルクーツク大学の二年制の予科で学ぶ。1931年、病院の職業技術学校で二年間学ぶ。その後農業技師の学部で四年間学んだ後帰国。1936～1939年、セレンゲ県とブルガン県で農業技師。1939年、農牧業省部局長。1940年、農牧業大臣。1942年5月、人民革命党中央委員会工業部門長。1942年10月、イデオロギー部局長兼広報部局長、マルクス・レーニン主義担当長、国家ラジオ局長。1945年、対日戦中満州で特別隊長。1945年、11月外務副大臣。1950年1月、外務大臣。1951年7月、副首相兼外務大臣。1953年6月～1956年半ば、全職退職させられるまで政治局員になりイデオロギー担当書記。1956年、ソ連で大学院に入学し1959年農業部門で博士号取得。1959～1965年、モンゴル科学アカデミーで勤務。1965年、反党グループとして完全追放。*Дамдинсүрэн, Бусад*. Монголын Тухай БХК(б)Нын Баримт Бичиг 3-боть 1941–1952. тал 308; *Баасандорж Ц*. 20-р Зууны Монголын түүхт хүмүүс хөрөг-2. УБ., 2007. тал 302.

64 *Баасандорж*. 20-р Зууны монголын түүхт хүмүүс хөрөг-2. тал 311–312.

らせていたのではないかと思われる。歴史家ボルドバートルも次のように述べている。「ブムツェンドは、モンゴルの発展はソ連との友好関係を発展させることにかかっていると考えていた。しかし、この友好関係はモンゴルの独立が保障された状況でのみ実現できると固く信じていた⁽⁶⁵⁾」。

しかし、長年チョイバルサンの部下として活躍し、ソ連との関わりの強かったルハムスレン、ジャンバルドルジ、ダンバは主にツェデンバルを支持した。この中で注目されるのはダンバである。ダンバはチョイバルサン時代において、行き過ぎた粛清と破壊行為に一切支持を与えなかったと言われている⁽⁶⁶⁾。それにもかかわらずツェデンバルを支持したのである。その背景には、次の要因があったと考えられる。ダンバはモンゴル内務省の諜報員であった可能性が高く⁽⁶⁷⁾、ソ連人顧問がモンゴル内務省に強い影響力を有している事実を熟知していたと考えられる。彼は、当時の権力関係を把握した上でツェデンバルを支持することがソ連への支持を意味すると考えたと思われる。

モスクワは、モンゴル国内の政治情報に精通している元在モンゴル・ソ連大使プリホドフを通じて政治状況を綿密に観察していた。例えば、チョイバルサンが死去した後の1952年2月26日に、プリホドフはモンゴルの次期指導者についてソ連共産党中央委員会に次のような報告を送った。

チョイバルサンが死去したことにより、誰が次期指導者となるかが問題となっている。(中略)教育、理論、知識や我が国に対する政治的な姿勢に照らして、ツェデンバルがもっとも望ましい候補であることは間違いない。(中略)ツェデンバルはモンゴルの指導部を自分の味方に出ることが出来る。彼にとっては、集団指導体制を尊重することが重要であるが、彼はそれに否定的である。集団指導体制を尊重しないことがブムツェンドとスレンジャブの強い反感をかっている。このことでツェデンバルに反対する勢力が容易に形成されうることを考慮しなければいけない。ツェデンバルが指導権を握るために、モンゴル国内にいる我々の同志達は協力する必要がある。⁽⁶⁸⁾

プリホドフの後任の在モンゴル・ソ連大使イヴァンニコフ (Иванников⁽⁶⁹⁾ 1951～1953

65 *Болдбаатар*. Дулаан хааны хүү. тал 49.

66 ダンバは、寺院などのモンゴルの歴史的建造物の破壊に対して批判的だった。ボルドバートルは、ダンバはその他の県知事とともに歴史的建造物を守るための問題を提起した結果、いくつかの寺院が保護されたと述べている。*Болдбаатар*. Миний хоцрогдсонийг дэлхий мэднэ. тал 25–26.

67 ダンバが内務省の諜報員であったことは、ダンバ追放を決定した1959年のモンゴル人民革命党第三総会の議事録に記されている。この議事録によれば、ツェデンバルは次のように述べた。「ダンバは内務省の諜報員だった。彼はこの任務を1930年から1948年まで続けた。内務省側もダンバが有力な職に就いたので1943年に諜報員から外したが、1948年まで自分で自発的に来て報告を行っていた。その時には政治局員のことを密告していた。(中略)ダンバ自身も内務省の諜報員であったことを隠してない。『1943年に私(ダンバ)を外したのでそれ以降参加してない』と言っていた」。 *Намсрай Ц. Ю. Цэдэнбалын удирдсан нэгэн бүгд хурал*. УБ., 1990. тал 15–16, 23.

68 *Дамдинсүрэн, Бусад*. Монголын Тухай БХК(б)Нын Баримт Бичиг 3-боть 1941–1952. тал 263–265 (РГАСПИ, ф. 82, оп. 2, л. 1280, л. 30).

69 1950年、在モンゴル・ソ連大使顧問。1951年12月～1953年12月、在モンゴル・ソ連大使。*Дамдинсүрэн, Бусад*. Монголын Тухай БХК(б)Нын Баримт Бичиг 3-боть 1941–1952. тал 344.

年在任)による1952年3月7日の報告にも次のようにあった。「ツェデンバルは12年間にわたりモンゴル人民革命党書記を務めるなか、チョイバルサンにもっとも信頼された部下であった。(中略)チョイバルサンはツェデンバルを常に自分の後継者だと考えていた。そして、我々と会う時にもその考えを何度も繰り返していた⁽⁷⁰⁾」。翌日、ソ連共産党中央委員会政治局はモンゴルの指導者についての返答を決議した。それには、「モンゴルの次期指導者の選出に関するツェデンバルからの質問に対して次のように返答する。『我がソ連では中央委員会が首相を推薦する。貴国も同じだと考える。したがって、モンゴル人民革命党中央委員会が推薦する人物を我々は支持する』⁽⁷¹⁾」とあった。

当時、ツェデンバルを支持する勢力はソ連側と頻りに接触を図っていた。例えば、1952年4月14日にソ連外務大臣ヴィシンスキー(A.Я. Вышинский)がスターリンに送った報告には次のようにあった。

モンゴルの外務大臣ルハムスレンと検事総長ジャンバルドルジらはモスクワ滞在中に、プリホドフと接触し、モンゴル国内における首相の推薦について意見の相違があることを報告した。中央委員会書記ダンバがツェデンバルをモンゴル首相の職に推薦したが、この案にモンゴル人民革命党中央委員会政治局員全員が反対し、さらにモンゴル国家大ホラル議長のブムツェンドまでが反対の発言を行っている。このため、首相の選出は延期されたそうである。本件の詳細が書かれた文書をルハムスレンがプリホドフに提出した。ルハムスレンの話だと、スレンジャブは自分が首相になるために反ツェデンバル活動を行い、ブムツェンドを巻き込んでいるとのことである。⁽⁷²⁾

このように自らの支持者を通してソ連側に権力闘争の内実を説明することにより、事実上ツェデンバルはソ連に支持を求めていたと解釈できよう。ではなぜツェデンバルはソ連側の支持を求めたのだろうか。第一に、モンゴル国内でツェデンバルの人气が低かったことが挙げられる。これについてプリホドフは次のように語っている。「ツェデンバルの人气を低下させた要因は、彼がソ連人フィラトヴァと結婚していることである。彼がソ連人の妻を娶ったことをモンゴルの大衆の大半が否定的に受け止めている。(中略)また、ツェデンバルの大きな欠点は大衆の中に混じり、交流しないことだ⁽⁷³⁾」。

第二に、モンゴル国内におけるブムツェンドとスレンジャブの人气が高かったことが挙げられる。この点について権力闘争の当事者で人民革命党中央委員会の書記ソソルバラム(Д. Сосорбарам)の秘書を務めていたニャンボー(Б. Нямбуу⁽⁷⁴⁾ 1923～2008年)は次のよう

70 Дамдинсүрэн, Бусад. Монголын Тухай БХК(б)Нын Баримт Бичиг 3-боть 1941–1952. тал 266–268 (РГАСПИ, ф. 82, оп. 2, д. 1280, л. 31–35).

71 Дамдинсүрэн, Бусад. Монголын Тухай БХК(б)Нын Баримт Бичиг 3-боть 1941–1952. тал 268–269 (РГАСПИ, ф. 17, оп. 3, д. 1093, л. 60).

72 Дамдинсүрэн, Бусад. Монголын Тухай БХК(б)Нын Баримт Бичиг 3-боть 1941–1952. тал 271–272 (РГАСПИ, ф. 82, оп. 2, д. 1278, л. 68).

73 Дамдинсүрэн, Бусад. Монголын Тухай БХК(б)Нын Баримт Бичиг 3-боть 1941–1952. тал 264 (РГАСПИ, ф. 82, оп. 2, д. 1280, л. 31–35).

74 1923年、トシェート・ハン県のダルハン・チンワン・ポンツァグツェレンギーン旗の「シャルハイの丘」生まれ(現在のトゥブ県セルゲレン・ソム)。1936～1939年、通信技術の勉強をした

に回想している。「チョイバルサン死後の国内では『スレンジャブがチョイバルサンの後継者〔閣僚会議議長：引用者〕になる』という意見が上がっていた。(中略)国民の間でもスレンジャブの評判は悪くなかった⁽⁷⁵⁾」。さらに「大半の人は『スレンジャブがチョイバルサンを引き継ぐべきだ』と思っており、ツェデンバルが後継者になるという話はほとんど出ていなかった⁽⁷⁶⁾」というのである。また、ブムツェンドについて、プリホドフはソ連共産党中央委員会に次のような文書を送った。「モンゴル国民から寄せられている意見からすると、国民にとってブムツェンドは首相に推薦するのに最適な人物である。ブムツェンドの人生経験や国民の中での名声、我が国に対する態度から判断すると、首相に推薦するには相応しい人間である。しかし、彼の健康状態はこのような機会を与えるものではない⁽⁷⁷⁾」。

要するに、モンゴルの権力闘争においてツェデンバルの権力掌握に反対する勢力と支持する勢力は攻防を続けており、ツェデンバルの支持者たちは生き残りをかけて、ヴィシンスキー報告にあるようにソ連側に助力を求めたのである。1952年5月29日のモンゴル人民革命党政治局会議の決議で、モンゴル人民共和国閣僚会議第一副議長スレンジャブとともに内務大臣のバター(Д. Бараа)が解任されたことはこの文脈にあると考えられる⁽⁷⁸⁾。権力闘争の当事者であったニャンボーは、国内におけるスレンジャブとバターの解任劇を詳しく語っている⁽⁷⁹⁾。同じ政治局会議においてダンバラによるスレンジャブ批判が展開されたことについては、ツェデンバルも日記で触れている⁽⁸⁰⁾。

このスレンジャブ降ろしにソ連大使プリホドフが果たした役割も大きかった。そもそも、スレンジャブに対するプリホドフの目は厳しいものであった。特に1949年8月19日にプリホドフからマレンコフ宛てに送った手紙の中で、彼はスレンジャブに対して民族主義者というレッテルを張っていた。明らかにスレンジャブはソ連側にとって好まれる存在ではなかったのである⁽⁸¹⁾。また、プリホドフは1952年2月26日にソ連中央委員会宛ての文書の中でも、スレンジャブが内務省を自分のもののように操っていると指摘し、警戒を強めていた⁽⁸²⁾。結局スレンジャブは、1954年4月1日の政治局決議で政治局員からも解任された⁽⁸³⁾。

後に働いた。1940年、トゥブ県教師育成学校を卒業。1942年、飛行訓練を終了し、1948年まで航空部隊に配属。1951年、人民革命党幹部育成学校卒業。1952～1956年、党中央委員会委員兼ウランバートル市人民革命党書記。1956～1962年、ウムヌ・ゴビ県党中央員会書記。1962～1964年、ソ連の大学で学ぶ。1964年12月、総会で反党グループリーダーとして追放。Sanders, *Historical Dictionary of Mongolia*, p. 542.

75 Юки К., *Лхагвасүрэн И.* XX Зууны Монголчууд 2. Осака, 2007. тал 203–204.

76 Юки, *Лхагвасүрэн.* XX Зууны Монголчууд 2. тал 216.

77 *Дамдинсүрэн, Бусад.* Монголын Тухай БХК(б)Нын Баримт Бичиг 3-боть 1941–1952. тал 264 (РГАСПИ, ф. 82, оп. 2, д. 1280, л. 31–35).

78 НТА (Намын төв архив), ф. 4, т. 19, хн. 7, тал 134.

79 Юки, *Лхагвасүрэн.* XX Зууны монголчууд 2. тал 204–205.

80 *Сумьяа.* Гэрэл сүүдэр. тал 53–54.

81 *Дамдинсүрэн, Бусад.* Монголын Тухай БХК(б)Нын Баримт Бичиг 3-боть 1941–1952. тал 187–190 (РГАСПИ, ф. 82, оп. 2, д. 1280, л. 10–24).

82 *Дамдинсүрэн, Бусад.* Монголын Тухай БХК(б)Нын Баримт Бичиг 3-боть 1941–1952. тал 265–266 (РГАСПИ, ф. 82, оп. 2, д. 1280, л. 30).

83 НТА, ф. 4, т. 21, хн. 15, тал 2.

モスクワにしても、以上のような権力闘争は好ましいものではなかった。親ソ的なツェデンバルを支援することが自国の利益に適うことは明らかだった。ナディロフが回想するように「スターリンにとっては、チョイバルサン死後のウランバートルにおいてクレムリンの政策を受け入れることが出来る能力を有する信頼できる人〔ツェデンバル：引用者〕をモンゴルの指導者にすることが重要であった⁽⁸⁴⁾」のである。以上からすれば、ツェデンバルの最初の危機をスターリンが救ったと考えることができるかもしれない。ツェデンバルもスターリンに対して、1952年5月8日の第二次世界大戦終戦7周年祝賀会に際し、スターリンを最高の言葉で褒め称えることでこれに答えた⁽⁸⁵⁾。

最終的に、1952年5月26日の政治局会議で第51/64決議が出され、ツェデンバルがモンゴルの首相に任命された。この決議は、ツェデンバルを首相に任命する旨を国家大ホールが決議し、5月28日に公表することを同志ブルムツェンドに一任すると宣言していた⁽⁸⁶⁾。勝利を収めたツェデンバルは1952年7月11日のウランバートル市労働者集会においてチョイバルサン路線の継承を宣言し、次のように述べた。「ソ連国民と交わした不滅の友好関係と偉大なスターリンの父なる愛情を受けたモンゴル国民は、ソ連国民の無限の援助により、モンゴルの発展のために数々の成功をおさめた。我が偉大な指導者スヘバートル〔Д. Сүхбаатар⁽⁸⁷⁾ 1893年2月2日～1923年2月20日〕とチョイバルサン遺言を実現するため、レーニンとスターリンの教えの下で社会主義の道を前進する⁽⁸⁸⁾」。明らかにツェデンバルは、ソ連側に感謝の意を表したのである。

1952年9月19日、モスクワの中国大使館の宴会の席において、在北京・ソ連通商代表部首席ミグノフは在モスクワ・モンゴル大使ヤダムジャムツ（Ядамжамц）に次のように語った。「チョイバルサン元帥は死去したが、彼の親愛なる部下ツェデンバルがモンゴルの閣僚会議議長になっている。我々は、同志ツェデンバルは立派な人物だと理解している。ソ連政府とスターリンはツェデンバルを極めて早い時期に好意的に評価し、大事に扱ったと思う。このことは、普通のことでないということを感じておいていただきたい⁽⁸⁹⁾」。言うまでもなく、ツェデンバルはこの言葉を非常によく理解していたのである。

84 *Надилов. Ю. Цеденбал 1984 год. С. 87.*

85 ГХЯ (Гадаад хэргийн яам), ф. 2, т. 1, хн. 134, тал 26.

86 НТА, ф. 4, т. 19, хн. 17, тал 127.

87 1893年2月2日、(フレー)ウランバートル生まれ。1912年、ツェツェンハン県の軍に加入し、フジル・ブランの軍の訓練学校で訓練を受けた。1917年、ハタンバートル・マグサルジャブ軍の指揮下東国境で戦闘に参加。1918年、ボグド・ハン政権の国防省のタイピストに任命。1920～1921年、モンゴル人民革命党、モンゴル人民革命軍司令官。1921年、モンゴル通常軍創設に関与。1922年9月、政府は勇気ある英雄章を授与。1923年2月20日、病死（毒殺説もある）。1946年、スヘバートル広場に銅像が完成。1954年7月、スヘバートル、チョイバルサン霊廟が完成。
Sanders, Historical Dictionary of Mongolia, pp. 305–306.

88 НТА, ф. 4, т. 20, хн. 239, тал 112.

89 ГХЯ, ф. 2, т. 1, хн. 135, тал 93.

4. ツェデンバルの後退

モンゴルの激動はこれで終わらなかつた。1953年3月5日に強い政治的影響を及ぼしたスターリンが死去した。彼の死を受け、共産圏諸国は大いに動揺した。ソ連ではスターリンの死後、権力体制が独裁体制から集団指導体制へと移行した。ほどなくして、指導部内での争いにより内務機関を支配したベリヤが逮捕、銃殺された。ほぼ同時に、スターリン時代に「人民の敵」という汚名を着せられ、ラーゲリに送られていた人々が釈放された。

こうしたソ連の変化を前に、ツェデンバルを中心とするモンゴルの指導部も激しく動揺した。ツェデンバルは、スターリンなき新時代にどのような姿勢で臨むのか、判断を迫られたのである。当初、ツェデンバルをはじめとするモンゴル指導部は、ソ連に歩調を合わせるかのように集団指導体制へと移行する気配をみせていた。『モンゴル国史』によれば、1953年半ばにモンゴル人民革命党政治局は「集団指導体制を強化することについて」という決議を採択した⁽⁹⁰⁾。しかし、このような集団指導体制への移行を匂わせる動きは、ツェデンバル率いるモンゴル指導部のコンセンサスとしてというよりも、むしろ指導部内での権力闘争の産物であった。ブムツェンドをはじめとする反ツェデンバル勢力は早い段階から集団指導体制を要求しており、ツェデンバルは妥協を迫られていたと考えられる。

ナディロフによれば、スターリンの死の直後の1953年3月に、モンゴル人民共和国はソ連に加盟する決議を採択した。ツェデンバルはこの決議を積極的に支持した。その際、モンゴル国内ではブムツェンドだけがこの決議に反対した⁽⁹¹⁾。ソ連ではモロトフが反対し、次のように述べたという。「ソ連加盟に関する問題に関してあなた〔ツェデンバル：引用者〕に会うように指示された。貴国の決定は大きな間違いである。今はその時期ではないのだ。あなた方は国際情勢を理解しているだろう。ソ連帝国主義という名目でまたも批判が噴出することになる⁽⁹²⁾」。その後、ツェデンバルはソ連加盟への動きを見せなくなる。このことがツェデンバルの求心力を失わせ、モンゴルにおける政治権力の分割を促したと考えられる。

ツェデンバルはひとまず集団指導体制に賛同したものの、チョイバルサン批判には否定的だった。ツェデンバルは1954年7月8日のスヘバートルとチョイバルサンの霊廟の開会式の演説で、次のようにチョイバルサンを礼賛している。「スヘバートルとチョイバルサンはモンゴル＝ソ連両国の友好関係発展のために勇敢に戦った（中略）この友好関係とソ連国民の援助がなかったならば、我が自由な祖国、我が国民の平和的かつ自由な生活もなかった。我が国の発展の歴史的経験がこのことを証明している⁽⁹³⁾」。

このような駆け引きの中、1954年11月にモンゴル人民革命党第12回党大会が開かれた。その公式宣言文書では以前のような強烈的なチョイバルサン礼賛は影を潜めたが、スターリン

90 *Болдбаатар Ж., Санждорж М., Ширяэндэв Б.* Монгол улсын түүх. УБ., 2003. тал 284.

91 *Надилов. Ю.* Цеденбал 1984 год. С. 43–44. また、ダンバの回想によれば、ソ連加盟提案を В.ジャンバルドルジ、内務大臣ツェデブ、ハムスレンらが起草し、ジャンバルドルジは泣きながら加盟することを訴えた。ブムツェンド以外、全員加盟に賛成したという。*Болдбаатар, Даидаваа.* Шичлэлийн төлөө хөдөлгөөн, түүний хувь заяа. тал 20.

92 *Сумьяа.* Гэрэл сүүдэр. тал 90.

93 *Цэдэнбал Ю.* Монгол ардын хувьсгалын тухай. УБ., 1980. тал 37.

を褒め称える表現は残っていた。たとえば、11月19日の大会開会式の演説でダンバは「マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの指導万歳⁽⁹⁴⁾」と述べる一方で、チョイバルサンについては触れずじまいであった。翌日のツェデンバルの演説にもチョイバルサンについての文言は見あたらず、「モンゴル人民革命党はモンゴル人民の先頭に立ち、人民を指導する機関である⁽⁹⁵⁾」と述べるなど、党主導の指導体制を強調していた。

他方、ダンバが第12回党大会で演説した集団指導体制の重要性についての主張は広く支持された。彼は1954年4月1日の書記任命に関する政治局決定⁽⁹⁶⁾に続き、同大会において正式に人民革命党第一書記に昇格した⁽⁹⁷⁾。ダンバは1954年11月23日の大会で「我が党が遂行してきた幾つかの指針、規定は時代遅れとなり、今日の党内生活には不適切である⁽⁹⁸⁾」と述べ、改革のイニシアチヴを取ろうとした。また、「党の規則を変更する」と題した彼の翌日の演説は次のようなものだった。

集団指導体制を厳守することにより、党内民主主義を果たすことが出来る。集団指導体制は党指導の最高の規律である。党を偏った決断から守ることができるような集団指導体制を厳守することが出来れば、党の活動全体が正常になる。集団指導体制は、多くの人の知識や意見、そしてすべての党員の経験に基づき、指導部が決断を下す時には偏った結論を出すことなく、善悪の分別を付けるだけの能力を与える。(中略)このような変更により、指導部は党員が自らの経験を顧みずに個人で決定を下すような事態を防止できるだろう。⁽⁹⁹⁾

ダンバの演説に党大会参加者の多くが賛同し、同決議は全会一致で可決された⁽¹⁰⁰⁾。

以上からすれば、ダンバがモンゴル人民革命党第一書記に選出されたのは、ソ連と国内の支持を確保したことによるものであったと考えるのが自然であろう。この点について、さらに次のような傍証もある。第一に、1959年の第三総会におけるツェデンバルの証言によると、ツェデンバルがダンバに「私は中央委員会の会議であなたを第一書記に推薦した」と語りかけたのに対し、ダンバは「それはどうか。モスクワが推薦し、助言してくれたのではないかと応じたという⁽¹⁰¹⁾。明らかにダンバはソ連側の関与を勘繰っていたのである。また、ツェデンバル自身も、「1954年からダンバが政治局を指導した。当時東側諸国やソ連では党や政府のリーダーをそれぞれ任命していた。そもそも仕事が大変であったこともあり、ダンバを書記に推薦した」と強調した⁽¹⁰²⁾。実際、この発言に関連する1954年4月1日付政治局決議には「モンゴルの閣僚会議の業務に集中することが重要なので、人民革命党中央委員第一

94 Үнэн. 19.11.1954.

95 Үнэн. 20.11.1954.

96 НТА, ф. 4, т. 21, хн. 15, тал 7.

97 НТА, ф. 4, т. 20, хн. 1, тал 3.

98 Үнэн. 23.11.1954.

99 Үнэн. 24.11.1954.

100 Үнэн. 25.11.1954.

101 Намсрай. Ю. Цэлэнбалын удирдсан нэгэн бүгд хурал. тал 12.

102 Мөн тэнд. тал 9.

書記を辞任したいというツェデンバルの要望に承認を与える⁽¹⁰³⁾」とあった。

第二に、このようなツェデンバルの決断の背後には、単にソ連の動きに従うという以上の考慮が働いていたとみられる。というのも、かねてよりツェデンバル単独の権力掌握に対する反感はモンゴル国内において根強く、当時においてはそれが指導部内での論争の種となっていた。たとえば、シレンデブ（Б. Ширэндэв⁽¹⁰⁴⁾ 1911～2001年）によれば「国内の多くの人々は権力をツェデンバル自身に集中させることに反感を持ち、ダンバを支持する人が多かった」と回想している⁽¹⁰⁵⁾。おそらく、集団指導体制の評価に関してツェデンバルは妥協を迫られていたのである。ツェデンバルはスターリンの死という突発事を受け、生き残りをかけて譲歩をしたと見られる。

5. スターリン批判をめぐるツェデンバルとダンバの権力闘争

1954年以降になると、ソ連内部では次第に権力闘争が目につくようになった。これと時期を合わせるように、モンゴルでも指導部内の対立が激しくなった。たとえば、チョイバルサン時代に粛清された多くの政治犯の罪状に関する再調査が始まったのである。調査の中心に立ったのはダンバであり、これに伴いチョイバルサンの支援を受けてきたツェデンバルとダンバの対立は決定的になった。例えば、ダンバの息子スヘボルドは次のように回想している。「ツェデンバルが父に対して悪意を抱くようになった最初のきっかけは、粛清された被害者の名誉回復問題であった⁽¹⁰⁶⁾」。

ダンバが本格的に粛清事件に取り組んだのは、モンゴル人民革命党第一書記に就任して間もなくであった。彼はおそらく、ソ連側で行われている名誉回復に似通った政策を採るべきだと考えたのである。1954年12月9日のモンゴル人民革命党の決議によって⁽¹⁰⁷⁾、1930年代から1940年代に行われた大粛清についての調査委員会が設立され、「ポルト・アルトール事件」⁽¹⁰⁸⁾の真相解明が試みられた。この結果、1955年5月18日、モンゴル人民共和国政治局会議はポルト・アルトール事件で有罪となった人々を釈放し、取り調べで暴力の使用

103 НТА, ф. 4, т. 21, хн. 15, тал 6.

104 1911年5月16日、フブスグル県生まれ。1932年、モンゴル労働青年のためのウラン・ウデの大学予備校に入学。その後、イルクーツクの教育大学の法学部で学ぶ。1941年、チョイバルサンの助手に任命され、ゴビ地域で就労。1943年、ソ連共産党の戦時労働の学習のためにモスクワに派遣。1944～1948年、モンゴル人民革命党の思想宣伝担当書記。1944～1953年、モンゴル国立大学副学長。1954年まで文部大臣および文化教育担当閣僚会議副議長。1957年まで閣僚会議第一副議長。1949～1951年、国家小ホラル代議員。1982年まで人民大ホラル代議員。1947年12月、政治局員候補。1954年11月～1958年3月、政治局員。1961年からモンゴル科学アカデミー長。Sanders, *Historical Dictionary of Mongolia*, pp. 656–657.

105 Шинкарев. Цеденбал и его время. Том 2. С. 284.

106 Пүрэв Жа. Халуун яриа. УБ., 2004. тал 58.

107 Болдбаатар, Бусад. Монгол улсын түүх. тал 285.

108 内務省が1948、1949年にチョイバルサン元帥の殺害を企てているとして100人ほどを逮捕し、拷問を加えた上で有罪とし、40人ほどを銃殺した事件。Гэндэн Т. Гурван түмэн хүний амь. УБ., 1999. тал 163.

を許した政治局の1942年12月24日付秘密決議を無効とする旨を採択した⁽¹⁰⁹⁾。この政策は、ツェデンバルを窮地に追い込んでいった。

モンゴル国内において政策上の対立が深まっていた1956年2月、モスクワでは折からソ連共産党第20回党大会が開かれた。この大会は、スターリン批判がなされたという点で特別な意味を持っていた。2月25日、外国の代表を除く非公開会議において、フルシチョフはスターリンを批判する秘密報告を行った。同大会にはモンゴルからダンバ、ツェデンバル、トゥムル・オチルの三人が参加した。従来の慣行とは異なり、この代表団のリーダーは決定されていなかった。そのことは、ボルドバートルとダシダワーの証言から裏付けられる⁽¹¹⁰⁾。彼らによると、ソ連側は党第一書記つまりダンバが代表団をリードすると認識しており、そのことでツェデンバルはショックを受けた。他方で、ダンバも何をすべきか飲み込めていなかったという⁽¹¹¹⁾。ツェデンバルは同大会でモンゴル代表として演説したものの、ソ連側がモンゴル指導者として待遇したのはダンバであった。フルシチョフはダンバと会談し、個人崇拜の克服を進めるべきである旨を語った⁽¹¹²⁾。

第20回大会後、ツェデンバルがソ連に残ったのに対し⁽¹¹³⁾、ダンバはすぐに帰国した。ダンバは帰国後ほどなくして、モンゴル人民革命党中央委員会第4回総会の準備に取りかかり、中央委員会のルブサンフンドブを長とする準備委員会を設立させた。そこでダンバはチョイバルサン批判を展開すべく、総会演説の原稿を用意させた。帰国したツェデンバルは、ダンバが準備した総会の演説原稿を読むなり、その内容に強く反対した。ボルドバートルによれば、党第一書記の秘書だったペルジェ（М. Пэлжээ）が次のように述べたという。「ある日ダンバが入って来て、『この演説の原稿をツェデンバルが読んだ。我々が計画したことがだめになりそうだ。この原稿を至急処分してくれ』と言い、出て行った」。ボルドバートルはまた、政治局会議で二人が激しく口論したとも伝えている。そこでは、ツェデンバルが「あなた〔ダンバ：引用者〕はジャンバルドルジの話に基づき、原稿にチョイバルサンがドクソム、ルブサンシャラブらを逮捕させたと書いているが、これは間違いだ⁽¹¹⁴⁾」と言い、原稿の一部を削除させたという。

総会を目前にして、ツェデンバルとダンバは正面から衝突した。ツェデンバルにしてみれば、スターリン批判の流れがチョイバルサン批判へと展開すれば、自身の身に危険が及ぶことが予想された。またツェデンバルは、スターリンとチョイバルサンに対して素朴な尊敬の

109 *Болдбаатар*. Миний хоцрогдсоныг дэлхий мэднэ. тал 54. 1942年2月24日の決議にはチョイバルサン、ツェデンバル、スレンジャブらが署名していた。*Ринчин*. Улс төрийн хэлмэгдүүлэлт ба цагаатгал. тал 44–45.

110 *Болдбаатар*, *Даидаваа*. Шичлэлийн төлөө хөдөлгөөн, түүний хувь заяа. тал 32.

111 *Болдбаатар*, *Даидаваа*. Шичлэлийн төлөө хөдөлгөөн, түүний хувь заяа. тал 32.

112 *Пүрэвдагва Н.*, *Туяа С.* Будант жилүүдийн эмэгнэл. УБ., 1999. тал 42. 下斗米によれば、秘密報告の内容はダンバに知らされていた。当時の力関係に鑑みて、ダンバの通訳を通じてツェデンバルも秘密報告の内容を把握していたと思われる。下斗米伸夫「スターリン批判の「地政学」」『ロシア・東欧研究』第35号、2006年、6頁。

113 ツェデンバルがソ連にどれほど滞在したのかは不明だが、ブラウダによると1956年3月21日に「ウランバートル党活動家会議」を開き、第20回党大会の結果について報告している。

114 *Болдбаатар*. Миний хоцрогдсоныг дэлхий мэднэ. тал 57–58.

念を抱いていた。対するダンバは、大粛清という恐怖の時代を生き延びた人間であり、スターリンやチョイバルサンに対する評価はツェデンバルよりも厳しかった。

このような対立の構図が解消されないまま、両者は人民革命党中央委員会第4回総会を迎えた。1956年4月2日から6日にかけて開かれた第4回総会においてダンバは、「ソ連共産党第20回党大会の結果および我が党の各機関の目標について」と題して以下のような演説を行った。

ある時期において、人民の偉大な勝利をマルクス・レーニン主義の原則に基づいて正しく説明する代わりに、チョイバルサンのみ功績としたことがあった。これは我々のイデオロギーにとって少なからぬ意味を持った。マルクス・レーニン主義者であれば、モンゴル人民革命党の指導の下で我が国民の多大な努力により結実した成功を、チョイバルサンただ一人の功績に帰すべきではない。しかし、我々は最近までチョイバルサンを崇拜しすぎていた。たとえば新聞、雑誌の記事、あるいは文学作品のいくつかを見ればチョイバルサンを少なからず崇拜していたことが分かる。また、モンゴル人民共和国憲法をチョイバルサン憲法、第一次五ヶ年計画をチョイバルサン五ヶ年計画として彼に結び付けようとしてきた。

1947年に内務省はポルト・アルツール事件で80人を逮捕した。しかし、内務省職員は個人崇拜に熱中した結果、事実に基づいた取り調べを行わず、法律を無視し、42人を処刑し、38人を牢獄に入れた。⁽¹¹⁵⁾

ダンバはチョイバルサン時代の個人崇拜を批判した。彼は、集団指導体制に移行するよう訴えたのである。これに対してツェデンバルは、ボルドバートルとダシダワーによれば、次のように発言した。「ソ連共産党第20回大会ではスターリンについて、10月革命を主導し共産主義を建設することで共産党に多大な貢献をした偉大なマルクス主義者である」と書いてある。だからスターリンの文献は使っても良い。(中略)チョイバルサンを崇拜したのはスターリンを崇拜したからである。指導者を大衆が支えることが重要だと我々が考えていたこと、これが個人崇拜に関係している⁽¹¹⁶⁾」。ここからは、第20回党大会が示したスターリン批判の方向がうかがえない。

とはいえ第4回総会では、いくつかの国家機関が1930年代にチョイバルサンを崇拜した結果として、革命的な合法性が踏みにじられ、多くの犯罪的行為が行われたとの認識が示された。また、一層の調査を政治局に一任することが決定された⁽¹¹⁷⁾。総会では、党指導部への批判も活発に展開された。『モンゴル国史』によれば、ルハムスレン、マイダル（Д. Майдар）、ルブサン（Л. Лувсан）らは国民のために仕事をせず、特別待遇に甘んじていると名指して批判された。また多くの参加者が、これまでチョイバルサン崇拜がもたらした悪影響を直視せず、崇拜を批判する作業を怠ってきたと反省の弁を述べた⁽¹¹⁸⁾。

115 НТА, ф. 4, т. 23, хн. 2, тал 66–68.

116 *Болдбаатар, Даидаваа*. Шичлэлийн төлөө хөдөлгөөн, түүний хувь заяа. тал 37.

117 *Болдбаатар Ж., Даидаваа Ч., Дашиям Г., Болд Ж., Баянжаргал Ч., Туяа С., Баттөмөр Б.* Монгол улсын хөгжлийн бодлого, үзэл баримтлал: Хувьсгал, өөрчлөлт. УБ., 2008. тал 166.

118 *Болдбаатар, Бусад*. Монгол улсын түүх. тал 287.

ただし、モンゴルのそれまでの指導体制を批判する者の間でも、批判の対象にばらつきがあった。批判対象ごとに大まかに整理すれば、第一にチョイバルサン批判、第二にソ連批判、第三に国内の発展状況に対する批判という三つに分けることができる。

第一のチョイバルサン批判を展開したのはローホーズ（Лохууз⁽¹¹⁹⁾ 1923～）、バター（Багаа）、バガー（Багаа）、ダムディンジャブ（Дамдинжав）、ヤダムスレン（Ядамсүрэн）らであった。とりわけローホーズのチョイバルサン批判は次のように手厳しいものだった。

個人崇拜は我が党に蔓延していた。それが原因で、党に多くの損害が生じた。しかし、この点についての反省が、党大会での基調演説に十分に反映されていない。中央委員会の第一書記ダンバは、演説の中でスターリン崇拜がソ連共産党の活動にもたらした害悪については述べたものの、我が党ではどのようなであったかについて触れてない。私が考えるに、個人崇拜、特にスターリン崇拜は我が党に多くあった。（中略）同志ダンバは演説で、我々はチョイバルサンを崇拜していたと述べた。スターリンであれ、チョイバルサンであれ、我が党内で誰が崇拜を政策として実行していたのか。自己を崇拜するようにチョイバルサンは強いたのか。これについて、ダンバは演説で触れていない。もし、崇拜を誰が指示したのか証明できないのであれば、我が党の指導者たちが捏造したに違いない。⁽¹²⁰⁾

第二のソ連に矛先を向けた批判は、ダンガースレン（Дангаасүрэн）、ブルネーバートル（Бүрнээбаатар）、ソドノムツェレン（Содномцэрэн）らが展開した。「同志たちは国民の中で働き、彼らから学ぶべきであるのに、実際には国民から距離を置いていた。そのため自国の発展状況を知らず、ソ連で行われているすべての政策を単純に模倣し、失敗した⁽¹²¹⁾」（ダンガースレン）、「我が国に個人崇拜が広がった大きな原因は、スターリン崇拜を模倣し、チョイバルサン崇拜を行ったことにある⁽¹²²⁾」（ブルネーバートル）、「我々はソ連のスターリン崇拜を模倣していた。集団指導体制に関してもそうであった。このようなことはやめるべきである⁽¹²³⁾」（ソドノムツェレン）。これらは、チョイバルサンへの直接的な批判を避けたものとして整理できよう。

第三に、スターリンとチョイバルサンに対する言及を避け、自国の発展状況の遅れを批判するという曖昧な態度を示す者がいた。たとえば、ダシ（Даш）、ドルジバト（Доржбат）

119 ゴビアルタイ県生まれ。1942年、ウランバートル経済中等実業学校を卒業。1944年、モンゴルの新幹部育成学校。1953年、ソ連共産党中央委員会指導下の高等党学校で学ぶ。彼はモンゴル人民革命党ウランバートル市委員会でも働いた後1954年まで、モンゴル人民革命党中央委員会のマルクス・レーニン部門長。1956～1962年、国家農牧省を指揮、農牧業第一副大臣。1962年、モスクワのチミリャゼフ農業アカデミーで勉強。1964年にウランバートルに戻り、モンゴル人民革命党大会に参加し、反党グループとして追放された。Sanders, *Historical Dictionary of Mongolia*, pp. 423.

120 НТА, ф. 4, т. 23, хн. 2, тал 129–130.

121 НТА, ф. 4, т. 23, хн. 2, тал 190.

122 *Болдбаатар*. Миний хоцрогдсоныг дэлхий мэднэ. тал 61.

123 *Болдбаатар*, *Бусад*. Монгол улсын хөгжлийн бодлого, үзэл баримтлал: Хувьсгал, өөрчлөлт. тал 167.

らの次のような言辭がそれに該当する。「我が国の農業の発展が他の共産諸国から著しく遅れていることを認識すべき時が来た。(中略)人々を冤罪で処刑し、党に損害を与えていたことについて次回の総会で詳しく追及しなければならない⁽¹²⁴⁾」(ダシ)、「我々はマルクス・レーニン主義について詳しく学びすぎている。理論を、工業や農業の実態に合わせて研究する必要がある。実生活からかけ離れている⁽¹²⁵⁾」(ドルジバト)。

以上のように、モンゴル人民革命党の上層部の中にはニュアンスの異なる意見が存在した。中でも、ローホーズの発言は注目に値する。ダンバは彼の批判を受け、総会中にローホーズの批判の妥当性を認め、個人崇拜についてのローホーズの批判に基づいてこれまでの党の活動を調べるべきだと提言した。ダンバはローホーズが報告をするまで、自分のツェデンバル批判が党上層部の中でどの程度支持されるか自信が持てなかったのであろう。ローホーズの意見に力を得てここまで踏み込んだのである。こうした動きに対してツェデンバルは、ローホーズは党を批判したと非難し、続けてローホーズの主張を受け入れたダンバを攻撃した⁽¹²⁶⁾。こうしてチョイバルサンの評価をめぐる、第4回総会は大荒れの様相を呈した。

6. 肅清問題におけるダンバの取り組みとソ連の関与

総会後にダンバは、チョイバルサン時代に肅清された人々の罪を晴らし、名誉を回復しようと試みた。それは、スターリン後のソ連の政策に沿うものであった。この過程で決定的な意味を持ったのは、スターリン批判により、東ヨーロッパにおいて混乱が生じたことである。ソ連が指導してきた幾つかの国でスターリン批判をめぐる国内で対立が生じると、ダンバが進める肅清事件の調査もソ連側にとって厄介な問題になった。

第4回総会後の1956年4月21日、人民革命党政治局は内務省が行った不正な政治的迫害に対する調査委員会の設置を決議(101号決議)した。その委員長はシレンデブとし、その他に36人が調査委員になった⁽¹²⁷⁾。調査委員会は、1932年から1947年に実行された政治的肅清事件を解明し、調査結果をモンゴル人民革命党政治局に提出するように依頼された。この委員会は、1956年4月から翌年7月にかけて主な事件を調査し、党中央委員会書記だったバーサンジャブ、モンゴル青年同盟長センゲドルジ(Ж. Сэнгдорж)、マグサル(Е. Марсар)ら36人の名誉回復を行うべきだとする調査結果をまとめ、これを1956年7月4日に政治局に提出した。政治局は36名を無罪とする決議を発した⁽¹²⁸⁾。

このようにソ連共産党第20回大会以降、積極的に政治肅清事件の解明に取り組んだ調査委員会は、内務省の資料を調べていく過程でチョイバルサンの秘密資料を閲覧できないという問題に直面した。同資料はチョイバルサンの死去以降、ツェデンバルが保管していたものであるが、ツェデンバルはその調査を断固として拒否したのである。ダンバは、シレンデブとともにこの資料の公開を強く求めていた。シレンデブは、「調査委員会の意見を討論する

124 НТА, ф. 4, т. 23, хн. 2, тал 89–90.

125 Мөн тэнд. тал 118.

126 *Болдбаатар, Бусад*. Монгол улсын түүх. тал 288.

127 *Баатар С. Эх орончид ба Цэдэнбал*. УБ., 2005. тал 44.

128 *Ринчин*. Улс төрийн хэлмэгдүүлэлт ба цагаатгал. тал 75–76.

際、ダンバとツェデンバルの主張は激しく対立した。ダンバは調査をさらに進めると主張したが、ツェデンバルはそれに賛成しなかった」と回想している⁽¹²⁹⁾。シレンデブはまた、「私は調査委員会をリードする立場の人間としてダンバの意見を支持した。ツェデンバルは私を疑い、監視した。(中略)ダンバが政治局のある会議でこの問題を取り上げたのに対し、ツェデンバルはチョイバルサンの資料館に保管されている資料を調査委員会に提示することを拒んだ。『肅清事件の調査から後退している。政治局員シレンデブの行動をも監視させている』などと強い口調で話した」と記している⁽¹³⁰⁾。事実がこの通りであったか否かは断定できないが、ダンバが内務省資料にアクセスできなかったのは事実だったと思われる。

仕方なくダンバとシレンデブは、肅清事件の解明に取り組むために、ソ連側に協力を要請した。シレンデブの回想によると、彼の調査委員会は、ダンバの署名付きでソ連共産党中央委員会書記のスースロフ宛に、ソ連で処刑されたゲンデン (П. Гэндэн⁽¹³¹⁾)、アマルといった16名のモンゴル人について再調査するよう請願する手紙を送った。スースロフからの返答は「上記の人々は帝国主義者のスパイでもなく、反ソ連分子でもなく、また人民の敵でもないので、モンゴルには彼らの名誉を社会的に回復する権利がある⁽¹³²⁾」というものであった。調査は一定の成果を上げ、1957年1月2日にモンゴル人民革命党政治局はアマル、ロソル、ドクソムら249人の名誉を回復させた⁽¹³³⁾。

しかし、ソ連側はダンバらを支援し続けたわけではなかった。1957年5月14日、モンゴル人民革命党中央委員会の書記ダンバとツェンドはスースロフと面会した際、ゲンデン、アマル、ドクソム、ルブスンシャラブら32人の資料の現物を見せるよう請求した。それに対しスースロフは、26人には法的責任を負わせる根拠がないので名誉を回復したとしつつ、彼らに関連する資料をモンゴル側に渡すことについて難色を示した。スースロフは資料を公開することにより、反政府勢力が勢いづくことを懸念したのである。おそらくそこで彼の念頭にあったのは、1956年のポーランドやハンガリーでの経験であったと考えられる⁽¹³⁴⁾。スースロフは、ダンバらモンゴル指導部が1957年の10月革命40周年式典に参加するためにモスクワを訪問した際にも、上記と同様の主張を繰り返した⁽¹³⁵⁾。スースロフは、モンゴルが肅清事件の解明にこれ以上取り組むことを望まなかったのである。

ソ連側の鮮明な態度表明と言えるのが、1957年5月26日のソ連最高会議幹部会議長ヴォロシーロフ (К.Е. Ворошилов) のモンゴル訪問である⁽¹³⁶⁾。この訪問について、ツェデンバルの妻フィラトヴァは次のように回想している。「1957年5月にヴォロシーロフがモンゴ

129 *Ширэндэв Б.* Далайн давалгаанаар. УБ., 1993. тал 245.

130 Мөн тэнд. тал 245.

131 ローシチンによれば、1956年12月15日にソ連軍事最高裁はゲンデンの名誉を回復し、彼を有罪にした決定を取り下げた。モンゴルの最高裁は1962年2月13日に名誉回復した。*Роцин С.К.* П. Гэндэн. Монгольский национальный лидер. Штрихи Биографии. М., 2008. С. 139.

132 *Шинкарев.* Цеденбал и его время. Том 2. С. 288.

133 *Лхамсүрэн Б.* Арван зурагдугаар жаран мину. УБ., 2003. тал 27–28.

134 *Болдбаатар, Бусад.* Шинчлэлийн төлөө хөдөлгөөн, түүний хувь заяа. тал 43.

135 *Болдбаатар.* Миний хоцрогдсоныг дэлхий мэднэ. тал 63.

136 *Ширэндэв.* Далайн давалгаанаар. тал 249.

ルを訪れたことは、シレンデブに追い詰められていたツェデンバルを助けるためのソ連側の配慮であった⁽¹³⁷⁾。ツェデンバルが肅清事件の追及によってモンゴル国内で窮地に立たされるなか、フィラトヴァが主張するようにソ連側がヴォロシーロフを訪問させることでツェデンバルを支持したか否かは、確かに検証の余地がある。とはいえ、スターリン時代のソ連要人であるヴォロシーロフの訪問自体がツェデンバルの政治生命の帰趨に一定の効果を与えたことは否定できない。

1957年7月4日から6日にかけて開かれた人民革命党中央委員第6回総会において、肅清調査委員長のシレンデブが長期の治療や研究活動を名目として政治局員を辞任させられたことはこの文脈にあらう⁽¹³⁸⁾。このことについてシレンデブは、「私の健康上の理由から1957年7月にすべての職を自身の希望通り退職し、ソ連の科学アカデミー傘下の大学の博士課程に3年間通い、博士号を取得した⁽¹³⁹⁾」と述べている。しかし当時、政府高官のソ連留学は事実上の左遷を意味したのである。

7. ダンバ追放によるツェデンバルの全権力掌握と独裁体制の確立

ソ連側がツェデンバルを支持したことで、モンゴル内の権力闘争の帰趨は定まった。まず、1958年11月のモンゴル人民革命党中央委員会第2回総会でダンバの「国家と協同組合の商業の現状と今後の発展方法について」と題する演説が討議された時、ダンバを党第一書記から解任する問題が突如提起され、採択された。この解任劇について、ボルドバートルは当時政治局にいた人々の次のような証言を紹介している。「総会が始まる当日、政治局員は朝9時に集合した。しかし、ツェデンバルは入って来るや否やダンバを連れて出て行った。戻って来るとすぐにこの問題を提起した。この問題はこのような奇妙な状況で提起された。参加者はダンバの交替をこの日初めて知ったのである⁽¹⁴⁰⁾」。

ダンバがこの総会での自らの解任を想定していたとは考え難い。というのも、ダンバは同年3月のモンゴル人民革命党第13回党大会で中央委員会政治局員と党第一書記に選出されたばかりであり、またその際にはダムィデン（Б. Дамдин）書記、ラムチン（Д. Ламчин）、スレンジャブ書記、サムダン（Д. Самдан）書記、バルガン（С. Балган）候補といったダンバ派の人材が多く登用されていたからである⁽¹⁴¹⁾。このように自らの権力基盤を固め、そして総会での演説原稿まで準備していたダンバが第一書記から第二書記に突然降格された背景に、ツェデンバルの画策があったことは想像に難くない。ボルドバートルによれば、総会に出席していた多くの者がダンバ解任を不審に思った⁽¹⁴²⁾。

次に1959年3月の人民革命党中央委員会第3回総会で、ダンバは第二書記の地位からも外され、完全に政治的影響力を失った。ツェデンバルは27日の総会で「ソ連共産党第21回

137 Шинкарев. Цеденбал и его время. Том 1. С. 176.

138 Ринчин. Улс төрийн хэлмэгдүүлэлт ба цагаатгал. тал 77.

139 Ширэндэв Б. Далайн давалгаанаар номонд оруулсан зарим нэмэлт. УБ., 2000. тал 41.

140 Болдбаатар. Миний хоцрогдсоныг дэлхий мэднэ. тал 68.

141 坂本『モンゴルの政治と経済』54頁。

142 Болдбаатар. Миний хоцрогдсоныг дэлхий мэднэ. тал 68–76.

党大会の結果とモンゴル人民革命党活動の結論について」という演説を行ったが、そこにダンバ追放を図った彼の意図を読み取ることができる。ツェデンバルは演説の中でダンバを次のように強く非難した。

党各機関の実務に（中略）大きな欠点があることの責任を政治局全体が取るべきである。モンゴル人民革命党中央委員会第一書記であり、何年も政治局を指揮していた同志ダンバには、その責任の多くがある。同志ダンバはイデオロギー、思想に関して十分に武装しておらず、単なる実務的な仕事を追求し、真の共産主義的な規律を有していなかった。高度な要求もせず、我が国の発展を妨害し続けている国家への詐欺、傲慢な態度、権力者におもねってまでの権力の追求など、有害な事柄との闘争を放棄していた。⁽¹⁴³⁾

ツェデンバルの狙いは、この総会を利用してダンバを追放することであった。しかし彼とトムル・オチルを除いて、ダンバを強く批判する人物は現れなかった。逆に、ツェデンバルにも非があり、ダンバに全ての責任を負わせるのは妥当ではないとの意見も出された⁽¹⁴⁴⁾。ダンバも自らを批判する人々に強く反論し、「ツェデンバルの欠点を同志達が批判した。ツェデンバルにも欠点がある。それを直さなければいけない⁽¹⁴⁵⁾」とツェデンバル批判を展開した。ダンバはトウムル・オチルに対しても次のように反論した。「同志トウムル・オチルには多くの欠点がある。（中略）知識人の間に党と国家の指導部を否定するような記事や話を広めた。（中略）これは知識人が不健全な話をすることに一役買った。（中略）トウムル・オチルは『1957年5月の党の攻撃から私は知識人を救った。〔知識人批判についての：引用者〕決議が厳しく指摘していたのを私が修正させ、知識人を救った』と政治局の会議で話していた⁽¹⁴⁶⁾」。

ボルドバートルによると、ツェデンバルは総会でのダンバに対する攻撃が思ったほど功を奏さなかったので総会を延長し、ダンバから批判を受けた人々や自らの側近を集めてダンバを脅迫したという。そして準備が整うと、30日の8時から16時にかけて政治局の会議を開き、ダンバの件を特別に審議した。同会議において、1930年のバーサンジャブの粛清にダンバ自身が関わったこと、ダンバがソ連＝モンゴル国境条約の作成を妨害したこと、新しい人材を批判したことなどを挙げてダンバを攻撃し、総会最終日に自己の罪を認めさせた⁽¹⁴⁷⁾。

このうち、ソ連＝モンゴル国境条約の締結は注目すべきである。この件は1957年9月7日にモロトフがモンゴルに派遣されてきた時から表面化していた。モロトフはモンゴルに来るや否や、モンゴルとソ連（トゥヴァ）の間に国境線を引く問題を提起した⁽¹⁴⁸⁾。モンゴル側は、国境問題を扱うに際して歴史資料に基づき、また現地住民の現状を考慮した上で行う

143 НТА, ф. 4, т. 24, хн. 185, тал 80–81.

144 *Болдбаатар*. Миний хоцрогдсоныг дэлхий мэднэ. тал 77.

145 НТА, ф. 4, т. 24, хн. 187, тал 18.

146 НТА, ф. 4, т. 24, хн. 187, тал 20.

147 *Болдбаатар*. Миний хоцрогдсоныг дэлхий мэднэ. тал 79.

148 トゥヴァは1944年にソ連に加盟した。10年後、ソ連政府はモンゴル政府に対して、トゥヴァとモンゴル国境に関する交渉を開始するよう提起した。

との政治局第 387 号決議を採択し、閣僚会議第 458 号決議により外務大臣アバルゼド (C. Аварзэд) を担当に据えた⁽¹⁴⁹⁾。結局この問題は決定されず膠着状態に陥ったが、同時期にソ連を訪問していたツェデンバルは交渉開始から 1 ヶ月後、第 6 回会談議事録を読み上げ、次のように述べたという。「当初から国境沿いの民衆の利益を考えるべきであった。歴史問題を取り上げるべきではなかった⁽¹⁵⁰⁾」。つまりツェデンバルは第 387 号決議を誤りであると認識していたのである。ツェデンバルはソ連から帰国後の 1958 年 2 月 17 日、モンゴル人民革命党中央委員会政治局において次のように述べている。「トゥヴァとモンゴルの国境確定交渉は 2 ヶ月以上続いているが、交渉は膠着状態に陥っている。この問題はソ連＝モンゴル友好関係に基づいて決定するべきである。我が両国間で決定できない事柄はない⁽¹⁵¹⁾」。この結果、アバルゼドが解任され、代わってモンゴル国閣僚会議第一副首相ツェンドが担当に就き、1958 年 3 月 26 日に条約が締結された⁽¹⁵²⁾。この問題についてモロトフは次のように述べている。「アバルゼドはいくつかの問題において偏りすぎることがあった。(中略)〔ソ連側に付いた：引用者〕トゥヴァ人を憎むことがあった。我々はそのようなことを耳にするとは思ってもよらなかった⁽¹⁵³⁾」。

そのアバルゼドを支持し、歴史資料に基づき決定を下すように指示していたのがダンバであった。ボルドバートルによれば、1958 年 11 月 17 日の政治局会議でアバルゼドが批判された時、唯一ダンバのみが「アバルゼドが国境確定委員会の仕事を指導することが出来なかったのではなく、我が国の方針が間違っていた⁽¹⁵⁴⁾」とアバルゼドを擁護している。アバルゼドを擁護したことが、後にダンバ自身が攻撃される一因になったと考えられる。

ダンバの行動がモロトフにとって、反ソ的な言動として映ったことは確かであろう。ジャンバルスレンによれば、モロトフはダンバについて次のように述べたという。「私はダンバのことは熟知していた。とても古い人でモンゴル人民革命党の第一書記だった。私がモンゴルに行った時にツェデンバルを降格させ、彼が人民革命党第一書記を務めていた。彼はとても賢く、ロシア語は全く話さない。これだけでも彼が指導部にいる資格がないということだ。少なくともプラヴダを読むべきである⁽¹⁵⁵⁾」。

ダンバ解任により、モンゴル人民共和国ではツェデンバルに党と政府の権力が集中することになった。

おわりに

本稿での検討から冒頭の問いに対する答えをまとめると次のようになる。

第一に、スターリン時代におけるモンゴルは政治的にソ連に大きく依存した政策を採って

149 *Пүрэвдагва, Туяа*. Будант жилүүдийн эмэгнэл. тал 93.

150 *Бат-Очир Л., Эмхтгээж, Оршил бичиж, Хэвлэлд бэлтгэсэн Болд Б., Туяа Б.* Юмжаагийн Цэдэнбал дурггал. УБ., 2012. тал 289.

151 *Бат-Очир, Бусад*. Юмжаагийн Цэдэнбал дурггал. тал 290.

152 *Энхжаргал Ц., Мөнхжаргал Ц., Янжмаа Ц.* Базарын Цэдэн-Иш. УБ., 2005. тал 56–57.

153 *Бат-Очир, Бусад*. Юмжаагийн Цэдэнбал дурггал. тал 290.

154 *Болдбаатар*. Миний хоцрогдсоныг дэлхий мэднэ. тал 91.

155 *Жамбалсүрэн*. Ю. Цэдэнбал эрин зууны элч. тал 187.

いた。しかし、親ソ的な指導者チョイバルサンが死去し、さらにスターリンが死去することでモンゴルとソ連国内において権力闘争が起こった。それによって特にスターリンの死後、ソ連指導部のモンゴルに対する政策が一時的に流動化した。そのような政変が、モンゴル国内の権力闘争を可能にした。

第二に、モンゴル国内の政治的アクターが多様化したことで、ソ連はモンゴルに対してスターリン時代と同様の影響力を行使できなくなった。そこでソ連指導部は、自国の政策に近い人物を支持することで、モンゴルに影響を与えようとした。たとえば、モンゴル人民革命党第一書記ダンバの政策の中心は1930年代の犠牲者の名誉回復であったが、これはソ連国内でフルシチョフが進めた政策に近かった。ダンバはこれによりツェデンバルを追い詰めていった。しかし、1956年の秘密報告以降、国際共産主義運動に混乱が生じたため、ソ連指導部は自国のみならず共産圏における「行き過ぎた」スターリン批判に危機感を抱くようになった。ダンバの実行する粛清問題の調査はソ連にとってもデリケートな問題になったのである。このような国際環境のなかで、スースロフはモンゴルの権力闘争に関与し、ヴォロシエロフはそのモンゴル訪問を通じてツェデンバルを支援した。

第三に、スターリン批判を経てツェデンバル率いるモンゴルは親ソ路線を再選択したものの、そこには従来とは異なりモンゴル独自の戦略観が包含されていた。ソ連共産党第20回大会以降、モンゴル政治におけるソ連の政治的な影響力は回復した。しかし、それはスターリン時代のような厳しい従属関係を伴うものではなかった。たとえば、1959年のダンバ追放事件は、ダンバとモロトフとの対立という面もあるが、ソ連側の差し金ではなく、モンゴル指導部の独自の判断でなされたのではないかと考えられる。スターリン批判後もソ連はそれまでと同様にモンゴルと密接な関係を維持したが、政治粛清のような直接の関与は控えるようになった。1960年代初頭にフルシチョフはモンゴル国内にスターリン像を残置することに同意したが、それは新しいソ連＝モンゴル関係を象徴するものであったと言えよう⁽¹⁵⁶⁾。

以上のように、チョイバルサンとスターリンの死を受けて展開されたモンゴル国内の権力闘争をモンゴル＝ソ連関係と一体のものとして検討することによって、スターリン批判後のモンゴル政治に対するソ連の影響を相対化し、モンゴル政治の内発的な契機を確認できるのである。

156 *Надиоров. Ю. Цеденбал 1984 год. С. 92.*

Khrushchev's Denunciation of Stalin and Mongolian Politics: Power Struggle among the Mongolian Leaders under the Influence of the USSR

OYUNBAATAR Munkhjin

This article examines the form and depth of the influence of the Soviet Union on internal political struggles in Mongolia and the sea change after Khrushchev's denunciation of Stalin in 1956. I address the rise of Yu. Tsedenbal (1916–1991) as Mongolia's supreme leader, namely prime minister, in the 1950s. As few works have solidly documented Soviet-Mongolian relations after the Second World War, I attempt to integrate the analysis of Mongolia's foreign policy and domestic politics so as to gain a full picture of the political process of Mongolia early in the Cold War.

The preceding literature has widely accepted the overwhelming predominance of the Soviets in Mongolian politics, whose archetype was the dictatorship of Kh. Choibalsan (1895–1952). Yet the political structure dramatically changed after the deaths of Choibalsan and Stalin, which created power vacuums that made political struggles more dynamic both in Mongolia and the USSR. This to a certain degree diminished the Soviet grip on Mongolia, with the latter's politics fought between Stalinist and anti-Stalinist factions. During the political changes, D. Damba ascended as first secretary of the Mongolian People's Revolutionary Party and soon became Tsedenbal's main rival. The most prominent issues over which Tsedenbal and Damba collided were collective leadership, rehabilitation of those politically purged, and border disputes with neighboring Tuva. The strife over these questions could have ousted Tsedenbal as Mongolia's first man. Khrushchev had supported Damba's policy of rehabilitation before he and those surrounding him found it subversive to Soviet interests and shifted their favor from Damba to Tsedenbal. Against a backdrop of political turmoil in Eastern Europe triggered by the denunciation of Stalin at the Twentieth Communist Party Congress in 1956, the Soviets retained an oblique but substantial influence on Mongolian politics by defending Tsedenbal's pro-Soviet position.

This article has seven sections. The first section outlines the development of Stalin's support of Choibalsan's rise in the 1930s, a period of affinity between Mongolia and the USSR. It was the patronage of both Stalin and Choibalsan that enabled Tsedenbal to come to power. The second section depicts Tsedenbal's involvement in the cult of Choibalsan in the 1940s and the way in which Tsedenbal began to acquire leeway under Choibalsan's rule. The third section demonstrates the Soviets' commitment to Tsedenbal, who encountered the first political hardship after Choibalsan's death. The fourth section illustrates the relative decline of the Soviet influence in Mongolia as a result of Stalin's death, which gave vigor to anti-Tsedenbal voices and thereby compelled Tsedenbal to compromise with Damba by sharing power. Following the Soviet policy of "thaw," Tsedenbal attempted to appease internal critical movements. In the fifth section, I analyze the impact of the Twentieth Communist Party Congress in 1956 on Mongolian politics, particularly Mongolian leaders' criticism of Choibalsan at the Fourth Plenary Session of the Mongolian People's Revolutionary Party. Having participated in the Twentieth Soviet Communist Party Congress, where Khrushchev had revealed Stalin's crime, Damba and Tsedenbal fell into

furious conflict over how to cope with Choibalsan's legacy. Tsendenbal's hindrance complicated Damba's investigation of Choibalsan's criminal past and forced Damba to soften his tone of condemnation of Choibalsan. In the sixth section, I trace the Soviets' shift in political preference from Damba to Tsendenbal after the Twentieth Soviet Communist Party Congress. As this sea change took place due to the ferment in Eastern Europe, the Soviets began to see Damba's policy also as a factor disruptive to the USSR. Therefore, they decided to undermine Damba's power by backing Tsendenbal. In the final section, I pay special attention to the question of the boundary with the Soviet territory of Tuva as one of the fatal blows that worked to expel Damba from the Mongolian leadership. The alleged anti-Soviet stance of Damba in concluding the border treaty with the Soviets exacerbated Damba's already rapidly shrinking power.